

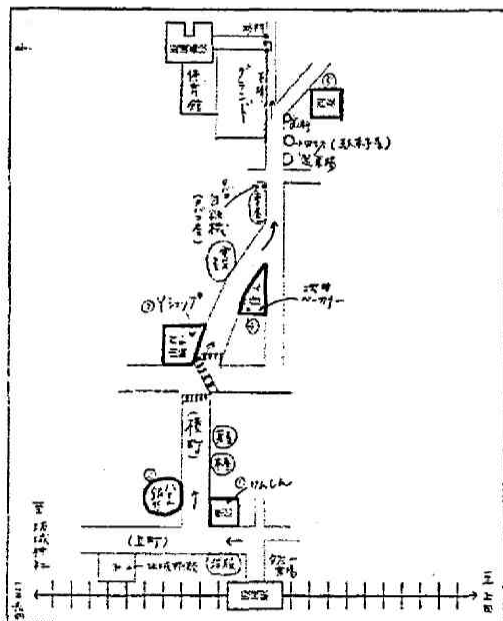
# 映像メディア（地図）を用いた学習指導の開発<sup>1</sup>

栗山 嘉章（長野県坂城高等学校）

## 1、はじめに

本論は、平成15年度に長野県坂城高等学校の3年生（24名 男女ともに12人）の選択「国語表現」の授業実践「道順を「ことば」と「地図」で伝えよう」（坂城駅から坂城高校までの道順を伝える）をもととしている。単元のねらいは、坂城駅から学校までの道のりを地図化することによって、言語メディアと映像メディアの特性を実践的に把握させることである。本論では言語と映像、双方のメディアの機能的特質だけでなく、授業場面における学習者のメディア使用の様相についても言及する。

図1：坂城駅から坂城高校までの地図（栗山作成）



## 2、単元の流れ

(A) 坂城高校のホームページにある地図を導入教材として学習課題を意識する。

(B) 坂城駅から坂城高校までの道順を地図にする。

(C) 坂城駅から坂城高校までの地図を言語で説明する。

(D) 言語化した道順の説明を他者（大学生）が、地図化する。<sup>2</sup>

(E) 他者（大学生）が変換した地図を見て、課題・問題点を挙げ、大学生に返信を書く。

(F) 大学生の地図やアドバイスなどを参考にして以前の地図を改良し、より完璧な地図を作成する。

<sup>1</sup> 本論は平成15年度修士論文「高等学校国語科教育におけるメディア・リテラシーの研究」（私家版）の第3章をもとに構成されている。

<sup>2</sup> 大学生が地図化した後に参考に提示した。（図1 図中番号①～⑤と横断歩道をここでは付加した。）

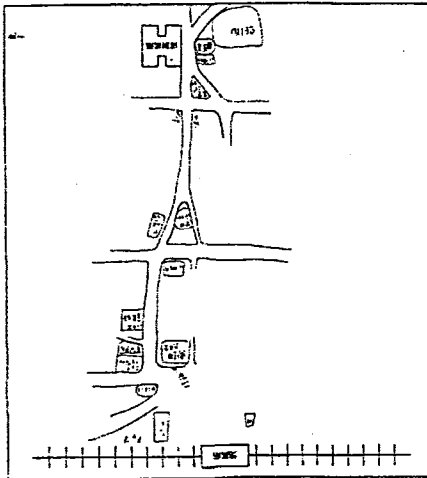
### 3 学習活動の分析

ここでは、学習活動の分析を、平均的な学習者（Y生を中心に）と特徴的な学習者（M生）を抽出して行なう。学習活動の主な分析箇所は、①学習者による地図作成レベル〔単元の流れ（B）〕②学習者による地図の言語化レベル〔単元の流れ（C）〕③他者（大学生）からの地図と返信文をもとに振り返るレベル〔単元の流れ（E）〕の三段階を中心に行なうものとする。

#### 3.1 全体的な傾向—Y生の学習活動を中心に—

##### 3.1.1 学習者による地図の作成レベル

図2：Y生の地図



この地図作成の時点では、通学路として駅から学校への道を利用する頻度の多少にかかわらず、みずからの記憶のあいまいさに地図作成の困難を感じている。具体的な目印となる建築物よりも、交差点の形状や距離感がつかめず、その表示のしかたがうまくできないことを述べる例が多かった。ここでは国語科の学習課題というよりは、地理的もしくは作図的な問題が多いと考えられる。この最初の地図化において学習者は、ま

ず目印となるもの（建築物）として「身近なもの・わかりやすいもの、おおきい目印」を比較的多く描いた。その目印を駅から距離の近い順に分類し、大きく3地点に絞るならば次のようになる。

(1) 出発地点である坂城駅近くの「けんしん（長野県信用組合）〔図1の①〕」や「八十二銀行（同②）」

(2) 駅と学校のほぼ中間点に位置する「コンビニ（Yショップ・山崎デイリー）〔同意③〕」や「次井ベーカリー（パン屋）〔同④〕」

③学校到着間際の大手スーパー「西友（SSV）〔同⑤〕」

この3地点、5ヶ所について学習者全員（23名 1名未提出）を調べてみると、「け

んしん」8名、「八十二銀行」4名、3名はどちらも描かなかった。コンビニは2名、パン屋は3名どちらも描かないのは1名、西友は23名の学習者全員が目印として描いていた。目印としては、この3地点（5ヶ所）を指示すると大枠で現地坂城高校までの最小限の地図化が可能である。この目印については、ほぼ全員の学習者が把握していたといえる。

### 3. 1. 2 学習者による地図の言語化レベル

この学習活動についての課題となるのは、3. 1. 1で行なった地図上に描かれた建築物や目印などの映像情報のうち、どの映像情報を取捨選択するかということ。若しくは、地図上にない情報を新たに付加するかということである。

表 1: Y生による地図の言語化

<p>①駅を出て、正面にまっすぐ歩きます。壁につき合<sup>つ</sup>たります。</p> <p>②つき合<sup>つ</sup>たら左にまがる。</p> <p>③まっすぐの道と右に曲がる道があるから、右にまがります。</p> <p>④そのまま、まっすぐ歩きつづけるとYショップがあります。道をわたります。</p> <p>⑤Yショップの前を<sup>つ</sup>って、道なりに、左側を<sup>つ</sup>って進んでいくと、登り坂になります。</p> <p>⑥その坂を登っていくと、十字路があります。</p> <p>⑦そこもまっすぐ歩いていくと、石のへいがあるから、へいに<sup>つ</sup>って進むと坂高です。</p>
--

Y生について具体的に見ると、地図の上では、描かれていない情報が冒頭文から付加されている。駅前口からでる部分には、①（表1の行番号に一致 以下同じ）「壁につき合<sup>つ</sup>たります」という情報を新たに入れ、出発地点での情報を伝えようと意識した表現がある。同様に到着付近にも⑦で「石のへい」という情報をいれている。この二つの情報は、地図作成上では記載されていない部分である。他にも、勾配に関する表現（⑤「登り坂になります」）が言語の上では表されていた。

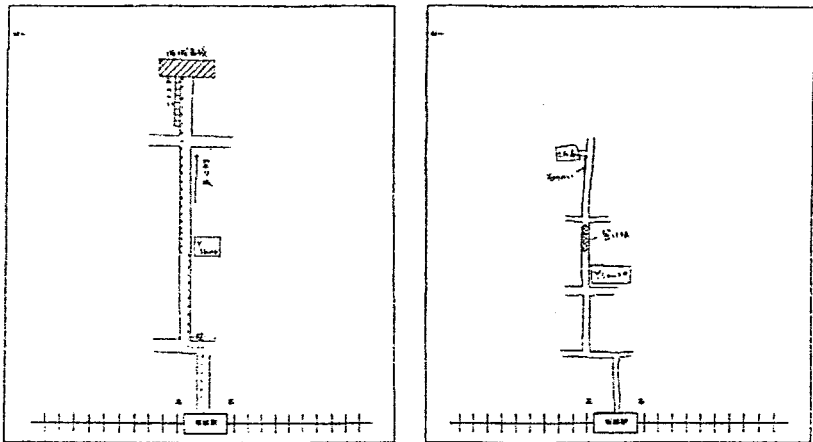
しかし、地図では多くの目印となる建築物などを書きながら、言語にしたときにその情報は大幅に削減されている。Y生の場合は、先の基準となる5つの建物を含めた17の目印を地図（図2）では描きながら、言語化に際してはコンビニの「Yショップ」しか記述がない。情報を受け取る相手が既存情報をほとんど持たない場合、正確に書かないとわからない。しかし、必要以上に書きすぎると混乱する場合もある。どこまで書くのが問われる部分である。しかし、ほとんどの学習者はこのY生のように大幅に目印となる情報を省略した。

次の特徴として、3. 1. 1の地図化と同様に「十字路」や「曲がり角」などの説明を言語化するのに困難を感じる学習者が多い。実際の地図では、十字路や四つ角などは、厳密に

その十字の形状をしたものは少なく、微妙な曲がり方や交差する道幅の違いなど、変則的な形状をしており、それを言語にする困難さを感じている。しかし、このような情報もほとんどの学習者の場合、取り上げずに記述をさせていると考えられる。

たとえば、Y生も唯一かいたYショップのある交差点（四つ角）もほとんど説明をせずにやり過ごしている。「④そのまま、まっすぐ歩きつづけるとYショップがあります。道をわたります。⑤Yショップの前を通過して、道なりに、左側を通過して進んでいくと、登り坂になります。」その交差点に対する学習者の説明不足のせいか、大学生の描いたYショップの位置は実際の位置である左側ではなく、道の手前の右側と逆方向になってしまっている。（図3）Y生だけでなくほかの学習者も、この交差点（横断歩道）の箇所を「もう少し歩くと横断歩道があって、それをわたります。」や「Yショップの前をとおってどんどん歩きます。」などと説明している。複雑な情報の省略化、簡略化がおこなわれている。

図3：Y生に対する大学生（2名）の地図化



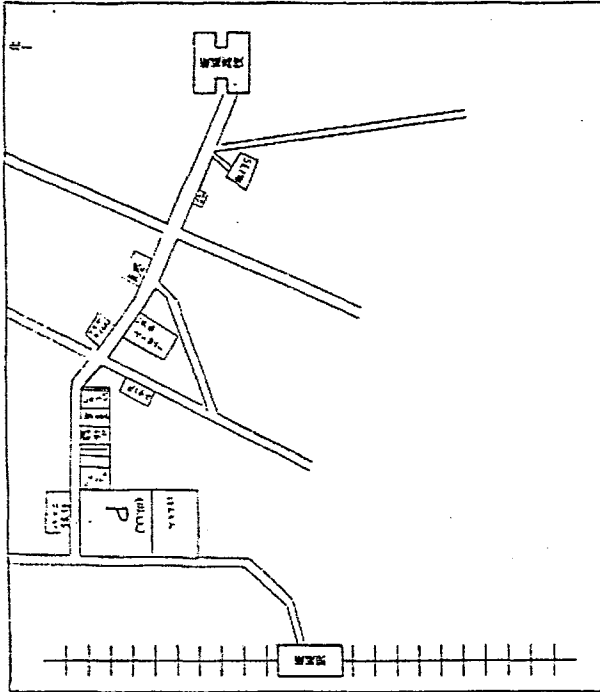
### 3. 1.3 学習者の「大学生の地図と返信文」をもとに振り返るレベル

ここでは、みずからの今後の課題について、「説明が足りなかった。」「もう少し細かくかけばよかった」「店の場所をもっとこまかくかけばよかった」など情報の不足についてコメントをしていた。中には「（課題は）全部」と書いた学習者も3人いた。ほとんどが情報不足を実感した。相手意識がなかったわけではないが、（「下手な字でゴメン」「頑張ってね」などのコメントをした学習者もいる。）それが表現としては十分に意識されなかった。

### 3. 2 個別的な傾向—M生の学習活動を中心に—

#### 3. 2.1 学習者による地図の作成レベル

図4：M生の地図



M生の地図  
(図4)は距離感について、意識にはあがったがあえて無視している。後の振り返りのインタビューで「学校までの距離感(自分自身には注)栗山)まったくないですから、次にどちらに曲がるかどうかを念頭に入れて」描いたという。同様に、「何があるか」という目印に重

点を置いてはならず、みずから歩く行き先の「交差点の位置」や「道の曲がり方」に意識がおれている。

建築物などは本人が振り返るように、「すっきりした型」で「お店の場所など(目印となるものは特定できるように)描いている。その特徴がよく現れているのは、コンビニ(山崎デイリー)にいくまでの道には、右側に多くの目印を書いており、左側(実際に目印となる建物などは右側に比べて少ないが)は、ほとんど描かれていない。これは学習者の中で、歩行の際、右側通行をするか左側通行をするのかを明確な意識をもって地図化していることの表れである。

### 3. 2.2 学習者による地図の言語化レベル

表 2 : M生による地図の言語化

- ①まず、駅を出て、左上の方に続いている道を通ります。
- ②すると、前へ真っ直ぐ行く道と、右へ行く道に出るので、その道を右へ。
- ③右へ曲がるとすぐに「けんしん」が右手側にある。
- ④そこは、右側の歩道にそって真っ直ぐ進んでください。
- ⑤すると横断歩道に行きつきますが、そこも真っ直ぐに進んでください。
- ⑥進んだ先には、「ヤマザキ」というコンビニが左側にあるので、横断歩道を渡ったら、そのコンビニの前の道を真っ直ぐ行ってください。
- ⑦後は、その左側の歩道にそって真っ直ぐ真っ直ぐ歩いて行って下さい。途中、分れ道などありますが、
- ⑧ひたすら左側の歩道にそって歩いてください。そうしますと、左側に校門が見えます。

M生についても、前述のY生のように、「ヤマザキ」(Yショップ)の交差点の情報提示については困難であったことが、振り返りのインタビューから推察される。M生は、上記にも述べたように道の左右どちら側を歩くのかということ強く念頭において、地図の言語化を行なっている。④「そこは、右側の歩道にそって真っ直ぐ進んでください。」⑦「後は、その左側の歩道にそって真っ直ぐ歩いて行ってください。」は、その具体的な証左になる。

図 5 : 「ヤマザキ」(Yショップ)交差点



この「ヤマザキ」(Yショップ)の交差点(図5)は、右側通行から左側通行に移動する場所である。ことばによる説明ではつぎのように表現されている。「⑤すると横断歩道に行きつきますが、そこも真っ直ぐに進んでください。」「⑥進んだ先には、「ヤマザキ」というコンビニが左側にあるので、横断歩道を渡ったら、そのコンビニの前の道を真っ直ぐ行ってください。」こ

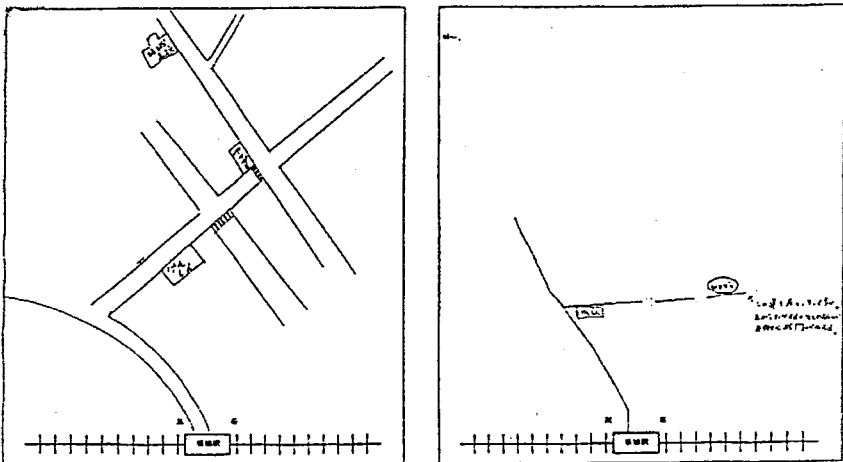
こでは、⑤と⑥の横断歩道は、同じ交差点にある横断歩道を示している。ところが、これを読んだ大学生は二人とも、違う交差点にある横断歩道と解釈している。(図6)またM生は、この横断歩道自体が右側から左側に移れるような、スクランブル交差点に近い形状

のため、右側から左側への移動を言語化してはいない。交差点を渡ると自然と左側にあるコンビニの前になるのであるが、その説明がないために、ひとりの大学生は、交差点の横断歩道を右から左に渡るように図示し、渡ったところに、コンビニを描いて、その道をまっすぐ行く、方角的には左折してしまったのである。(図6左) もう一人の大学生は、このYショップのある交差点からは道順を図示せずに言葉に置き換えてしまっている。(図6右) M生は、その交差点の説明を十分に意識して、左折しないようにと考えていたにもかかわらずである。以下振り返りのインタビューメモから必要部分のみ抜き出す。

表 3: 「交差点」についてのインタビューメモ (K: 栗山 M: M生)

K: 左側に移って進んでくださいってニュアンスがなかったよね。  
M: それはなかったですよ。ただ、横断歩道で左側で移るってわりじゃないですか。  
K: わり  
M: そこで説明が狂っちゃったんですけど、うちらは毎日通って、そうやって自然に歩いていっちゃうけど、やっぱり横断歩道を渡りながら左に移るって、厳しいものがありまして・・・。(中略)  
「渡りながら左に行ってください。」って言っちゃうと曲がり角を左の方にまっすぐいくことになっちゃうんで、別の方に行っちゃう。

図 6 : M生に対する大学生 (2名) の地図化



### 3. 2.3 2度目の地図作成レベル

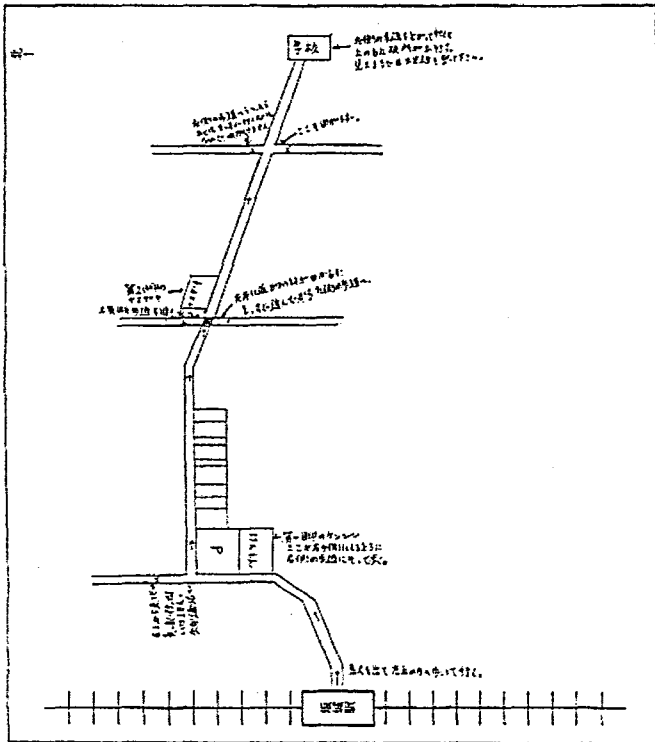
M生は、二度目の地図作成では、「けんしん」と「Yショップ」の二箇所の説明に的を

絞っている。それゆえ、一度目の地図には描かれていた「けんしん」から「Yショップ」に至るまでにある建築物（およびその名称）を削除している。その代わりに、地図上に「けんしん」から「ここが右手側にくるように、右側の歩道にそって歩く」と文字メディアによる情報を加えている。

Yショップの交差点についても、「左右に道がありますが、曲がらずまっすぐ進んでから左の歩道へ」「横断歩道をわたり、左のへ」という文字情報をいれている。

これは、以前に大学生に送った言語情報とほぼ同じであるが、文字言語だけでなく地図があるために以前のように、別の「横断歩道」と受けとられることはない。ここでは、M生が大学生からの地図と返信文によってみずからの学習を振り返り、不要と思われる映像情報を削減し、言語情報をふやし、焦点化していく新たな学習活動が現れている。

図7：M生の二度目の地図





#### 4 考察とまとめ

上記でのべたように、Y生・M生だけでなく、ほとんどの学習者が「言語による地図」の学習を振り返り、説明不足であったと認識している。「本校の位置をまったく知らない大学生」という条件をつけているにもかかわらずである。これについては、学習者である情報の送り手が、①自らはその道筋がわかっていること、②到着させることを最優先していること③言語による説明が複雑で困難な場合などを考慮すると過度に労力を要する情報は大幅に削減される方向にあると考えられる。しかし、受け手はその少ない言語情報をもとに自らの想像力でその情報を補いながら地図化を行うわけである。そのため、建物などの目印が極端に少なかったり、方向の定まらない地図を作成しなければならないことになる。

はじめに、地図を俯瞰的にみて、全体的な配置などを把握したうえで言語に変換した学習者はほとんどおらず、学習者は、自らメンタルマップ（脳内における地図のイメージ）をおこない、まず駅を出て、坂城高校に向かって歩き始めている。その折、建物などの目印は、ふだん通いなれた学習者には非常に無視されやすい。その建物は自分にとっては意識し、注目する景色ではなくなっている。そして、その少ない情報を言語化していく。

しかし、それを地図に変換する側では、まったく地理的な情報をもっていないので、学習者の書いた言語が、全て一字一句、等しい価値をもち、線条性（線的特質）を持った情報として届けられる。簡単に述べると、言語情報は軽重なく等価で読み手に伝わり、映像情報は自分の必要な情報をランダムにアクセスすることが可能なのである。

メディアの持つ機能は、そのメディアの送り手と受け手がそれぞれ単独に受け持つのではなく、その情報の発信者と受信者との関係の上にあらわれて来る。学習者はみずからの地図を言語化する中では、さしたる矛盾を感じずに学習活動を行っていた。ところが、これを第三者（大学生）に見せ、解読してもらった地図を受信するとともに、みずから描いた地図との相違に気づくことになる。それは一言でいうと「説明不足」である。送られる情報が地図であれば、受信者にとって不要な情報は、いくらでも無視できる。つまり、受信者には、その地図を自らの必要の有無により情報を解釈し判断していけばいい。また、時間と空間という場を考慮してみる。発信者が受信者と直接対面して地図を見ながら説明ができる。その「共通の時空間」における情報交換ならば、受信者は、不明な部分があれば、その場で訊くこともできる。しかし、今回は「共通の場」における、直接対面での情報提供ではなく、一方向的な提供による情報の解読である。そのため、タイムラグが存在し、疑問部分や不明部分を発信者に尋ねられない。しかもその解読は、単なる言語の読み取りではなく、言語情報を映像に変換するという作業である。

先に述べたように言語メディアだけの場合は、語の次の語と続く線条化のために、一語一語が、語の軽重なく等価で繋がる。語と語、文と文との空白や断絶も、例えば外山滋比古（2002）のいうように「修辭的殘像」で結びつく。<sup>3</sup>

言葉を「読む」に当たって、姿のない牽引に感じ、非連続の言葉から動きを感じ取る能力もやはり「殘像作用の一種」であると考えてよいであろう。（同書 2001 p6）

しかし、言語を映像変換する場合、外山のいう「修辭的殘像」が考慮されるにせよ、独自の判断による方向転換や進路変更はほぼ不可能である。空白は空白として残り、断絶は断絶のままであり、受信者は新しい情報を獲得できない。さらに、ある情報を発信者の意図と間違えて判断したのならば、伝言ゲームと同様に、もとに戻ることはできない。送り手と受け手は「共通の場」で情報をやりとりしているわけではないので、訂正は不可能なのである。

---

<sup>3</sup>外山滋比古 2001『外山滋比古著作集1』（みすず書房 初出1961）